

Unser tägliches Brot gib uns heute
(我らの日用の糧を今日も与えたまえ)

石川 眞弓

奨励者紹介 [いしかわ・まゆみ]

同志社国際学院初等部・国際部チャプレン

日本キリスト教団京都丸太町教会所属牧師

その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた。大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちになさったしるしを見たからである。イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこにお座りになった。ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。イエスは目を上げ、大勢の群衆が御自分の方へ来るのを見て、フィリポに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と言われたが、こう言ったのはフィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとしているか知っておられたのである。フィリポは、「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えた。弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、イエスに言った。「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」イエスは、「人々を座らせなさい」と言われた。そこには草がたくさん生えていた。男たちはそこに座ったが、その数はおよそ五千人であった。さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。人々が満腹したとき、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」と言われた。集めると、人々が五つの大麦パンを食べて、なお残ったパンの屑で、十二の籠がいっぱいになった。そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に來られる預言者である」と言った。イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでもまた山に退かれた。

(ヨハネによる福音書 6章1—15節)

「日用の糧」と「日用のパン」

今からもう20年以上も昔の話になりますが、当時私は、家族と一緒にドイツのとある学生寮で暮らしていました。食事は一日に2回、朝と昼に寮の給食が出たのですが、それでもご飯が恋しいので、少し遠方にあるスーパーまで出かけてアメリカ米を買ってきて、日本人の知り合いが帰国間際に置いていってくれた電気炊飯器で、毎晩ご飯を炊いていました。

現在、日本の家庭で使われております炊飯器は、ひと頃のものに比べると、質もデザインも非常に進化しております。マイコンが内蔵されていて、炊飯を予約できるのは当たり前で、メニューによって上手に炊き分けもします。外観は美しく、リビングに置いてあってもモダンなインテリアに馴染みます。

けれども、私たちの家族がドイツで使っておりました炊飯器はいたってシンプルなもので、ただ「米を炊く」という、それだけの機能しかありませんでした。見た目もいわゆる「お釜」で、それ以上のものでは決してありませんでした。

さてある日のこと、私はこの旧式な炊飯器を窓際に置いておりました。すると、何か別の用事で我が家を訪れた寮の用務員さんが、この炊飯器を見て急に騒ぎ出したのです。「あんな物を窓際に置いていたら、危ないじゃないか」と言うのです。「今はまだ使っていません。ちゃんと電源は切っております」と説明しても、「とにかくあんな物を窓際に置かないでくれ」の一点張りです、すごい剣幕なのです。それだけではなく、その日のうちに私たちは寮長の秘書さんからも呼び出しをくらって、くどくどとお説教されました。

けれどもその内容を聞いているうちに、どうやら彼らがうちの炊飯器のことを、フライドポテトを作る機械と勘違いしているらしい、というのに気が付きました。もちろん、すぐに誤解は解いておいたのですが、後日、何気なく雑誌をめくっていた時に偶然フライドポテト調理器の広告を見つけて、思わず笑い出しました。お釜の形が炊飯器そっくりなのです。ただし、こちらの方も炊飯器と同じく、現在ではもっとスタイリッシュなものができているようですが…。

ドイツ人はパンやじゃがいもを主食にしていますから、パンを焼くための大きなオーブンや、じゃがいもを自動的にフライドポテトにしてくれる機械などは、とても大切です。お釜の形を見たら反射的に、あの高温になるフライドポテトを思い浮かべて、「窓際なんぞに置いて、火事にでもなったらどうするのか」と思われても、不思議ではありません。

あるドイツ人寮生などは、私たちが炊飯器を使う姿を見て、「米を炊くのになぜわざわざ専用の機械があるなんて、面白い」と言っていました。彼らも米を食べるには食べますが、その食べ方は、たとえば水を含ませてちょっとフライパンで炒めるだけとか、あるいは牛乳や砂糖と一緒に炊き込んでドロドロの甘いおやつにしてしまうとか、私たちから見ると、本来それだけで美味しいお米に対する侮辱ではないのか、と思われるような当時の扱いでした。

ところがこと「パン」に関しては、立場が逆転します。彼らが「パン」と言う時、それは、いろいろな種類の穀物がみっちり練り込まれた、栄養たっぷりの健康食を指します。

でも、私たちが「パン」と聞いてまず思い浮かべるのは、薄い食パンだったり、デザートに近い菓子パンだったりして、それが無ければ到底生きてはいけない、という切羽詰まった食物としては考えにくい、というのが正直なところではないでしょうか。そのことは日独の「主の祈り」を比較してみると、一目瞭然です。

Vater unser im Himmel,
geheiligt werde dein Name.
Dein Reich komme.
Dein Wille geschehe,
wie im Himmel, so auf Erden.
Unser tägliches Brot gib uns heute.

Und vergib uns unsere Schuld,
wie auch wir vergeben unsern Schuldigern.
Und führe uns nicht in Versuchung,
sondern erlöse uns von dem Bösen.
Denn dein ist das Reich und die Kraft und die Herrlichkeit in Ewigkeit. Amen.
『Liederbuch fuer die Jugend』
Quell Verlag Stuttgart 1969

天にまします我らの父よ。
ねがわくは御名（みな）をあがめさせたまえ。
御国（みくに）を来たさせたまえ。
みこころの天になるごとく、
地にもなさせたまえ。
我らの日用の糧（かて）を、今日（きょう）も与えたまえ。
我らに罪をおかす者を、我らがゆるすごとく、
我らの罪をもゆるしたまえ。
我らをこころみにあわせず、
悪より救いいただいたまえ。
国とちからと栄えとは、
限りなくなんじのもののなればなり。アーメン。

日本の教会で毎週祈られている「主の祈り」には、「我らの日用の糧を今日も与えたまえ」という一節がありますが、この「糧」という字は、ちゃんとこめへんになっています。

けれども、新約聖書が記された原語のギリシア語を始めとしてパンを主食とする国々では、この箇所はすべて、「我らの日用のパンを今日も与えたまえ」になっています。ドイツ語では、“Unser tägliches Brot gib uns heute”です。

グリム童話に垣間見る「主の祈り」

ところで、グリム童話の中に、この「主の祈り」の一節を踏まえて書かれたと思われるお話があります。
『Der Arme und der Reiche』（貧乏人と金持ち）というお話です。

ある時、神様が地上をあちらこちら歩き回っていらっしゃるうちに夜になって、疲れたので宿を取りたいと思われました。道の途中に二軒の家が向かい合わせにあり、一軒目は大きくて立派な金持ちの家、二軒目は小さくてみすばらしい貧乏人の家でした。

神様は「金持ちの家ならば迷惑がかかることもなかろう」とお考えになって、この家に宿を頼むことにされました。ところが金持ちはこの旅人が神様だとは気付かず、その身なりが質素で、あまりお金を持っていそうにない人間だと思い、けんもほろろに追い返してしまいます。

そこで神様は、今度は貧乏人の家に向かわれました。貧乏人もこの方が神様とは気付きませんでした。が、疲れて気の毒な旅人をすぐに家の中に招き入れ、客人として夫婦で手厚くもてなしました。特別なご馳走はなかったけれども、じゃがいもを茹でて山羊の乳を搾り、客人を囲んで楽しい雰囲気ですぐに語りだした。寝る時には旅の疲れを充分癒せるようにと、一つしかないベッドを客人に提供し、自分たちは床の上に藁を敷いて寝ました。

さて、朝が来て旅立つことになったこの客人、つまり神様は、戸口で貧乏人の夫婦を振り返ってこのように仰いました。「あなたたちは大変情け深いうえ、信心深い人たちだから、三つの願いを叶えてあげましょう」。

この時、貧乏人は答えます。「神様からの永遠の救いに入れられることと、我々二人が生きている限りは健康で、最低必要な、毎日のパンが手に入ることです。そうすれば三つ目をお願いすることなんて、もう何ありません」。

そこで神様は、彼らに祝福をお与えになったうえ、当初は望んでいなかった綺麗な新しい家までおまけにくださった、というお話です(筆者訳)。

ここで貧乏人が答えた「毎日のパン」というのがドイツ語では“Tägliches Brot”で、まさに「主の祈り」にある「日用の糧」に相当する言葉です。「主の祈り」はイエス様が弟子たちに教えられた、シンプルだけれども大事な要素がすべて詰まった祈りのエッセンスで、これを本当に丁寧に心を込めて祈るならば他の祈りは要らない、とまで言われています(マタイによる福音書6章9—13節、ルカによる福音書11章2—4節)。

「主の祈り」では全部で6項目のことが祈られますが、よくよく中身を見てみると、素朴な人間の願望が述べられているのは「我々の日用の糧を、今日も与えたまえ」という1項目だけで、あとの願いはすべて、神への信仰が中心になっています。

(1) 神の御名が崇められること (2) 神の国が来たり、神の国が地上にも実現すること (3) 神の御前に私たちの罪が赦されること (4) 私たちが誘惑に負けて悪しき者にならないこと

つまり先ほどのお話の貧乏人は、人間として願うべきことはまず神の救いであって、その後に生きていくのに最低必要な食べ物や、それを手に入れる為の健康なども与えられる、と考えていたことになります。そしてこうした神の祝福さえいただければ、人生これ以上望む必要なし、と判断したのです。聖書で「主の祈り」が最初に登場するのはマタイによる福音書6章9節からですが、同じ6章の33節には、「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」という言葉があります。

聖書が語る「命のパン」

さて、聖書には至る所に「パン」のお話が出てきますが、そのうちの一箇所、**「五千人の給食」**と呼ばれる有名な場面があります。

- 1 Danach fuhr Jesus weg über das Galiläische Meer, das auch See von Tiberias heißt.
- 2 Und es zog ihm viel Volk nach, weil sie die Zeichen sahen, die er an den Kranken tat.
- 3 Jesus aber ging auf einen Berg und setzte sich dort mit seinen Jüngern.
- 4 Es war aber kurz vor dem Passa, dem Fest der Juden.
- 5 Da hob Jesus seine Augen auf und sieht, dass viel Volk zu ihm kommt, und spricht zu Philippus: Wo kaufen wir Brot, damit diese zu essen haben?
- 6 Das sagte er aber, um ihn zu prüfen; denn er wusste wohl, was er tun wollte.
- 7 Philippus antwortete ihm: Für zweihundert Silbergroschen Brot ist nicht genug für sie, dass jeder ein wenig bekomme.
- 8 Spricht zu ihm einer seiner Jünger, Andreas, der Bruder des Simon Petrus:
- 9 Es ist ein Kind hier, das hat fünf Gerstenbrote und zwei Fische; aber was ist das für so viele?
- 10 Jesus aber sprach: Lasst die Leute sich lagern. Es war aber viel Gras an dem Ort. Da lagerten sich etwa fünftausend Männer.
- 11 Jesus aber nahm die Brote, dankte und gab sie denen, die sich gelagert hatten; desgleichen auch von den Fischen, so viel sie wollten.
- 12 Als sie aber satt waren, sprach er zu seinen Jüngern: Sammelt die übrigen Brocken, damit nichts umkommt.
- 13 Da sammelten sie und füllten von den fünf Gerstenbroten zwölf Körbe mit Brocken, die denen übrig blieben, die gespeist worden waren.
- 14 Als nun die Menschen das Zeichen sahen, das Jesus tat, sprachen sie: Das ist wahrlich der Prophet, der in die Welt kommen soll.
- 15 Als Jesus nun merkte, dass sie kommen würden und ihn ergreifen, um ihn zum König zu machen, entwich er wieder auf den Berg, er selbst allein.

『Die Bibel nach der Übersetzung Martin Luthers』

Deutsche Bibelgesellschaft 1984

ある時イエス様は弟子たちと一緒に山に登られましたが、御自分に付いて来た大勢の群衆がお腹を空かせているだろうと思い、彼らに食べ物を配ることを提案されました。ところが弟子のフィリポは答えます。
「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」。

デナリオンはローマの銀貨で、一日分の賃金だったそうなので、二百日分の日当をもってしても賄いきれないほど、夥しい群衆がいたということになります。男の数だけで五千人ということは、女子供含めると

一万人を超えていたかもしれません。とにかく、ここに集まった人全員に食べ物を配るなど到底無理な話で、イエス様のお言葉に対し、「冗談ではありません」というフィリポの心境が見て取れます。

ところが別の弟子のアンデレは、同じく無理な話だとは思いつつも、イエス様にお弁当持ちの少年がいることをお伝えしました。この少年は大麦のパン五つと魚二匹を持っていた、と言います（ちなみにドイツの大麦パンは、ドイツ語で Gerstenbrot と言います）。

そこでイエス様は人々を座らせるように仰って、少年のパンを手にとって神に感謝の祈りを唱えてから、人々に分け与え始められました。たった五つしかなかったはずのパンは、不思議にそこに居合わせた群衆全員のお腹を満たし、そのうえパン屑の残りは十二の籠に一杯になりました。つまり、弟子たちの分け前もちゃんとあった、ということです。

この「五千人に食べ物を与える」お話を、ごく自然にイエス様の「奇跡物語」として読むのも一つの読み方なのですが、ヨハネによる福音書に限ってみますと、もう一つ別の、大切な意味合いが隠されています。

同じ6章の35節でイエス様は、「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがない」と仰っています。さらに51節にはもっと具体的に、「わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである」とあります。

Jesus aber sprach

zu ihnen: Ich bin das Brot des Lebens.

Wer zu mir kommt, den wird nicht hungern;

『Die Bibel nach der Übersetzung Martin Luthers』

Deutsche Bibelgesellschaft 1984

つまり、イエス様が人々にパンを分け与えられた、というのは、イエス様が人々の為に御自分の肉を捧げられた、十字架に架かって贖いの死を遂げられた、という意味も含んでいるのです。このお話は、キリストが私たち人間を現実の食物でも、また霊的な救いにおいても、いわば物心両面で養ってくださる方であることを物語っています。

今日一日を生かされる

ところで、旧約聖書の出エジプト記にはもう一つ別の給食のお話があります。イスラエル民族の指導者であるモーセという人は、奴隷から解放されてエジプトを出た民が荒れ野で飢えていた時、神に祈ると「マナ」と呼ばれる不思議な食べ物を与えられました。この時、神から命じられたことは、「朝毎にそれぞれ必要な分を、家族の数に応じて取る」ということです。安息日の前日だけは二日分集めておいてもいいけれど、それ以外の日は欲張らずに、その日毎に集めなさい、という教えです。

もうお分かりかと思いますが、「主の祈り」の中、「我らの日用の糧を、今日も与えたまえ」という祈りは、新約聖書が書かれた時代を更に遡った大昔、旧約聖書の時代から受け継がれている信仰なので

す。あまり先のことまで心配し過ぎるのではなくて、今日一日、神によって生かしていただくのだ、という思いが込められているのではないのでしょうか。これに関して、二つの讃美歌をご覧ください。

一つはこの祈りの内容がズバリ歌われている讃美歌です
(私が昔住んでいたドイツの学生寮は主に神学生のための寮でしたので、毎日礼拝があって、この讃美歌集を使っていました)。

豊かな実りを祈って

主よ、私たちにお授けください、日毎の糧を。

物価高や食糧難からお守りください、あなたの愛する御子を通して。

いと高き御座におわします、父なる神よ。

(『Liederbuch für die Jugend』Quell Verlag Stuttgart より筆者訳)

次に、イラストの付いた方は、一般の書店で売られている子供の絵本(『Kinderlieder zum Singen und Spielen』 Mit Bildern von Gisela Gottschlich Noten versehen von Wolfgang Kaiser Pestalozzi-Verlag, Erlangen p.32)で、ドイツ人が古くから歌い継いできた童歌です。3番まで歌詞がありますが、今日特に注目して頂きたいのは、1番と3番です。

1番では、「粉屋さん(Der Müller)が昼も夜も勤勉に働いてくれるおかげで、我々は安心してパンを手に入れることができるんだ」という粉屋さんへの感謝の歌になっているのですが、3番では「天(Der Himmel)が我々にパンをくださる、だから我々は守られているし、ひもじさに苦しむこともないんだ」という、神への信頼が歌われます。歌詞全体の結論は最後の部分に來ますから、この童歌はまるで、先ほどの讃美歌に呼応しているかのような内容になっています。

今まで見ていただいたように、ドイツに古くから伝わるグリム童話や童歌には、聖書の思想や信仰が深く根を下ろしたものが多くあります。

昔、5年間ドイツで暮らしていた頃は正直、「ドイツって不便な国だな」と感じることも少なくありませんでした。たとえば冷蔵庫に霜取りの機能が付いていなかったり、週末にはすべての店が閉まるので買い物ができなかったり、などです。

しかし、ゴミの分別などの、こと地球環境に関する問題では、ドイツは日本を遥かに凌いでいました。今思えば、個人の便利さや快楽を追求するよりも、人類全体が幸せに生きられる為に考え行動することの方が、より大切です。意識の深いところでキリスト教信仰にしっかりと根ざしたドイツの国民性が、一本芯の通ったブレない生き方に繋がっていたのかもしれない。

2016年5月11日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録

<HP では絵図等を省略しております。詳細は冊子体の『チャペル・アワー奨励集298号』をご覧ください。>